

公開授業の特徴と今後に向けて

ー 受講者へのインタビュー調査から ー

出相 泰裕 (大阪教育大学)

1. 問題設定

大学は地域の生涯学習に貢献することを長年にわたって求め続けられている。例えば、1981 年の中央教育審議会「生涯教育について (答申)」では、正規課程への社会人学生の受け入れ及び公開講座など正規の課程以外の開放に向けて、諸条件の整備を進めなければならないと述べられており¹⁾、2005 年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像 (答申)」においても、「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価される」ような生涯学習社会を構築するためには、公開講座をはじめとする各種の大学開放を通じ、質的に高度で体系的かつ継続的な学習機会を提供する者として、高等教育機関が重要な役割を果たすことが期待される旨、記されている²⁾。

大学開放を通じた地域住民の生涯学習支援においては、伝統的に公開講座の提供が実施されてきたが、大学教員も多忙さが深刻化し、研究にあてられる時間も減少してきている中で³⁾、大学開放の重要性を理解しつつも、公開講座を担当する余力がない、また担当したとしてもいっそう短期の講座にせざるを得ない状況が進んでいくことも十分考えられる。

こういった状況では、公開講座の意義は高まっているものの、教員の負担感という点から発展可能性に問題がみられるが、その一方で、「公開授業」と呼ばれる、正規の授業を公開講座として開放し、地域住民を受講者として受け入れる取組もみられている。この公開授業は全授業を公開という形では 2001 年度に信州大学で開始され⁴⁾、「開かれた大学づくりに関する調査研究 (平成 29 年度)」によると、現在、44%の大学が実施している。これは「公開講座を実施すること」の 97.1%と比べると少ないが、国立大学ではその比率はさらに高くなり、64.6%となっており、三分の二近くの国立大学が実施している⁵⁾。

公開授業であれば、教員からすると新たに別途授業を実施しなくても済み、また 15 回の授業となり、比較的体系的な内容を提供できる。今世紀に入って始まった、比較的歴史の浅い公開授業であるが、これまで受講者アンケート調査を中心とした先行研究が一部でみ

られている。そこでは受講者については、公開講座受講者よりも男性比率、年齢、学歴が高いということが指摘されており⁶⁾、また受講者にとっての公開授業の特徴としては、学生や教員及び大学教育の実際についての理解が進むこと⁷⁾、大学のキャンパスで若年の伝統的學生と共に学ぶこと⁸⁾、授業内容の質が高いことなどが挙げられている⁹⁾。

ただ公開授業の特徴に関わるこういった知見をインタビュー調査で検証する、深めるといった研究は管見によるところ、十分な蓄積がみられていない。そこで、本論ではどういった経緯で公開授業の受講を希望するようになったのか、地域には社会教育や大学の公開講座など、様々な教育機会がある中で、なぜ公開授業を選択したのか、あるいは公開授業ならではの学びや、受講に当たっての阻害要因にはどのようなものがあるのかといった視点から公開授業の特徴について検討していく。加えて、正規の授業を受けることにより、関心や学習意欲が高まり、社会人入学への関心が高まりはしないかといった疑問が湧くことから、社会人入学への関心についても取り上げる。そして、公開授業の今後の在り様について考察する。

2. 調査の方法と対象及び分析方法

調査は 2017 年 11 月から 2020 年 7 月にかけて実施した。調査にあたっては、学内の倫理委員会の審査を経た後、公開授業を実施している国立の A 大学の公開授業担当部署に調査の趣旨及び個人情報の扱い等について説明し、部署の理解・協力を得た。そこで受講者のほとんどが先行研究同様、シニア層であったことから、60 歳以上のシニア層に焦点をあて、該当者に調査についての案内を送付してもらった。そして調査に協力しようという方は大学もしくは執筆者にメール等で連絡をしてもらおうこととし、最終的に 5 名の方から調査への協力があつた。ただ 5 名では飽和点に達しなかったため、同様の取組を実施している他の国立大学である B 大学の担当部署に依頼をし、執筆者に調査への協力を表明された 60 歳以上の 5 名に引き続き調査を実施した。

調査は基本的に協力者の希望の場所・時間に調査者が訪れ、そこで 1 時間半から 2 時間お話を伺う形で実施していたが、2020 年 3 月以降は新型コロナウイルス感染症の流行により、協力者には調査方法を選択していただくこととし、最終的に表にあるとおり、対面調査 6 名、メールとスカイプによる調査 1 名、メールと電話 1 名、その他 2 名は複数回のメールのやりとりとなった。なおスカイプでは約 40 分、電話では約 30 分の調査時間となった。

協力者は全員それまでのフルタイムの職を退職した男性で、10 名のうち、大学院修了者は 2 名、大卒 5 名、高卒は 2 名で、先行調査と同様、比較的高学歴な層であった。

表 1 調査協力者の属性、主な受講科目及び調査方法

		調査時 年齢	学歴	退職前の 勤務	主な受講科目	調査方法
1	A	66	高卒	会社員	「地域から見る日本中世史」「東アジア近代史」「原文で読む中国古典」	対面
2	B	68	大卒	会社員	「地域連携学校教育入門」「アメリカと世界」「ヨーロッパ-フランスの窓から」	対面
3	C	64	高卒	会社員	「ヨーロッパ文明とは何か」「アメリカと世界」「地域から見る日本中世史」	対面
4	D	68	大卒	自営業	「ヨーロッパ文明とは何か」「平和のための教育」「アメリカと世界」	対面
5	E	68	高卒	公務員	「日常生活に見る心と行動の科学」「国際政治入門」「地域から見る日本中世史」	対面
6	F	69	大卒	高校教員	電気基礎、電気回路学、量子力学の世界	メール& スカイプ
7	G	70	院卒	会社員	地域文化論、細胞生物学、力学の世界、経済学、代数基礎、日本史概説	メール 3 回
8	H	69	大卒	会社員	離散数学、細胞生物学、地誌学概論、キャリア形成と人権、教育史特講、法学概論	メール& 電話
9	I	76	院卒	高校教員	解析学、代数学	メール 2 回
10	J	65	大卒	小中教員	地域文化論	対面

注 A~E は A 大学、F~J は B 大学の受講者

受講科目一例には、多数の科目を受講した者もいるので、調査時に言及のあった授業を主に掲載した (表 1)。

調査では半構造化アプローチのインタビュー調査を採用し、主として、(1)受講に至った経緯・受講動機、(2)受講に向けての阻害要因、(3)受講による学び・受講の成果、(4)他の教育機会と比べての公開授業の特徴、(5)社会人入学への関心といった点を中心に質問をし、その回答に対し、疑問が残る場合は口頭もしくはメールで繰り返し質問を行った。そして対面やスカイプ及び電話で調査を実施した際には本人の許可を取り、録音し、それをテープ起こししたものを協力者に確認してもらった。

分析にあたっては、テープ起こしをしたテキストデータの中で上記 4 点に関わる発言を抽出し、コード化し、各コードとそれに対応する文章データを相互比較しながら、内容の類似性と差異性からコードを集約していき、最終的にカテゴリーを生成し、事例・カテゴリーマトリックスを作成した。本論では各カテゴリーとその定義、該当事例数及びカテゴリーの下位概念と代表事例に関する記述から構成されるワークシートを掲載する。

3. 調査結果

(1) 受講に至った経緯

ここからはカテゴリーは<>で、サブカテゴリーについては[]で表すこととする。まず受講動機としては、第一に<余暇時間の充実>があった。調査対象者は定年退職後の男性ということもあって、多くの余暇時間を持つことになったが、朝起きて何もすることがないという生活はしたくない。充実感が欲しい。また頭を使わず、人と交流もしないでいると、呆けてしまうのではないかという不安もあり、[生きがいつくり]及び[健康的な生活の維持]という観点から何かしなくてはと活動に動機づけられていた。

第二は<学習ニーズの充足>で、表 2 にあるとおり、I は自分が持っている疑問を解消するような知識を得たい、知りたい事がいっぱいだと[幅広い知識への渴望]を持っていた。また A の場合は郷土史であったが、[長年学びたかった学習テーマの保持]があり、ようやく退職し、自由な時間を持って、そこでやりたかったができていなかったことに取り組みたいという思いがあった。

また<学習ニーズの充足>には、例えば、E のように心の病で苦しむ人を救うといった点で活動の質を上げたいという[社会貢献志向]や、J のように学校教員時代の専門教科の復習や指導方法の振り返りをしたいといった[キャリアの振り返り]も含まれた。

このように各人は活動志向的で、加えて学習ニーズを持っていたことから、その活動は学習活動に向かったわけであるが、それがなぜ公開授業を学習の場として選んだのであろうか。その理由の第一は<既存の教育機会への不満>であった。調査対象者はそれまで公民館の社会教育講座や大学の公開講座の受講歴のある人々であったが、それらは 1 回限りの短期の講座で深まりがなく、また受講生は高齢者ばかりで、学習するというよりも交流を求めている人が多く、こうした講座に物足りなさを感じていた。

また<若年期の教育上のやり残し感>も大学に目を向けた一因となっていた。D や B は大学時代に学生運動があったりして、十分勉強できなかった、あるいはしなかったことを後悔していた。また F や J は自分の好きだった教科の担当教員であったが、大学時代にそれを専門として学べなかったことを悔いており、一度大学で専門的にじっくりと学んでみたいという思いを長年にわたり持っていた。

加えて、<次世代への関心>も彼らを大学に引き寄せた要因となっていた。現代の若者、特に彼らの成長への関心があり、その成長に自身の経験を伝えることで多少なりとも寄与したいという世代継承的な意欲を持っていた者もいた。

(2) 受講に向けての阻害要因

受講に当たっての阻害要因としては、第一に＜大学への遠慮＞があった。大学の授業は本来正規の学生のためのものであるから、自分たちは邪魔にならないようにしなければならない、それゆえ積極的な参画は自重しなければならない。また教員も自分たちがいることで教えにくく、迷惑になっているのではないかという認識を持つ者がみられた。

表 2 受講の経緯に関わるカテゴリー、定義、事例数、サブカテゴリー及び代表事例

カテゴリー	定義	事例数	サブカテゴリー	代表事例
余暇時間の充実	退職後の余暇時間を有意義に健康に過ごしたいという欲求	8	生きがいづくり	・うちの家内とか、あなたがその歳でそれを勉強して何になるの。言いたくなるんでしょうね。彼女もこのごろ地元の英会話教室とかあって、英会話に行って、海外でも旅行するか言って、英会話やってますけども。だからあんたそんなに一生懸命やって何の役に立つの？と言うのですが、自分としては、やっぱり充実感とか、そういうあれですよ。(B)
			健康的な生活の維持	・頭と体をずっとどうにかせんといかんと思って、体の方が現役の時からゴルフをやっていたからね。ゴルフとそれと歩いたり、毎朝体操したり、ほいで体をずっと維持して、だから頭をやらんといかんと思うて、こういうところを探してたん・・・(A)
学習ニーズの充足	幅広く知らないことを知りたい、これまで学びたかったけれども学べなかったことを学びたい、さらには社会貢献するために資質能力を向上したい、これまでに自身のキャリアを振り返りたいなど、抱えている様々な学習ニーズを充足したいという欲求	8	幅広い知識への渴望	・現場で役立つものは、はやく理解したいと思っていましたが、自分が持っている疑問を分かるような知識も知りたいと思っていました。アイルランド問題、宇宙空間を膨張させている力、科学と信仰、人としての生き方、生きる力を付ける授業方法、他の国で実施されている授業方法、授業形態等知りたいことがいっぱいです。(I)
			長年学びたかった学習テーマの保持	・仕事が全くそういったことと無関係なことをやってきましたから、まあ本を読むのは続けてきていましたけど、時間ができたらそういったこと(郷土史)をね、やりたいなという思いはずっとありましたからね。(A)
			社会貢献志向	・専門的に心の問題を勉強して、それをボランティアで役立てばと思っていました。・・・この歳になって何か社会に還元できるようなことをしたいだけです。・・・自分の知識、自分自身をどんどん成長させて、いろんなところで、社会に還元して喜ぶ、すばらしいことやないですか。(E)
			キャリアの振り返り	・特に地域文化論というのは地理学の勉強ですと、私のかつての専門、中学校社会科と関連していますので、もう1回自分で復習というか、そういうこともありまして(J)

既存の教育機会への不満	内容の体系的・深みのなさや受講生への受講姿勢などから持つに至った他の教育機会への不満	7	公開講座への不満	・公開講座というのは一つのスポット的なテーマで、まあ講演会で聴いて、何か NHK のラジオの文化講演会などを聞いているようなもんでね。なんかもう一つ <u>単発</u> のやつで、 <u>物足りない</u> 。(B)
			社会教育への不満	・柏原市の市民講座みたいななんがいろいろあったんですわ。そんなんにも出てたんですけど、それもおもしろかったはおもしろかったんですけど、周りが私よりも上の人ばかりで、日ごろすることのない、まあわりと勉強熱心な人ばかりが集まるんですけど、やっぱりこう年寄りの集団という、刺激がない。(D)
若年期の教育上のやり残し感	高卒時に進学できなかったことや大学時に勉強しなかったこと、あるいは専門に学びたい分野があったが、入試で落ちて専攻できなかったことを後悔しており、その悔いを晴らしたいという思い	6	大学時代の不勉強後悔	・まず自分が勉強したいというのがあったんですよ。自分自身が大学で全然勉強してこなかったという負い目があった。でこの歳になってやっと親のありがたみというのがわかって、兄弟 3 人おっただんですけどね、全部私立大学入れてくれるからね。それで俺何勉強したんや。何にも勉強してないやないか。親が苦勞してるのに、何もしてなかったな。(D)
			学ばずに後悔している教科の存在	・高校時代、物理は好きだったが次第に理解がむづかしくなり、数学の方に興味移って、高校数学教師としての仕事を終えた、しかし退職して時間ができたらやはり物理に対する憧れを思い出し…かつてあこがれた物理学を趣味として勉強する(F)
			果たせなかった進学志望	・まあ私が高校を出て働いたのは経済的なのが主でしたから、できれば大学教育ちゅうのを受けたかったから…(A)
次世代への関心	現在の若年大学生の動向に関心があり、自分も彼らの成長に多少なりとも寄り合いたいという思い	2	世代継承性	・コメントを求められて、授業の中で、そうすると、自分の長い歴史、S 先生の授業は歴史が絡むような話だから、あの頃は実際こうだったんですよ。バブルの時代とかはね。そういうんで若い人と意見とか言えたら、何かのちょっとでも役に立てたらいいなという気はしますね。(B)
			若者への関心	・若い子と一緒に勉強できるという、ほんならどういいう若い子が、どういいう問題で教師になろうとしてんのかというのも見えてきたかった。若い子なんて僕ら接点ないですよ。仕事の時に入ってくるのは高卒で工場に来る奴やからレベルが違うし、そんなん見てると、教師を目指す若い子はどなんのかな。ものすごい興味があって。(D)

第二の要因としては、高齢学習者であることを反映してか、＜周囲の態度＞が挙げられた。B は配偶者から、その歳で勉強して何になるの、何の役に立つのと言われているが、そういった周りの態度もあってか、自身も「教えていただいたことを返せるかと言われると返せない」「この年齢で何ができる、できるわけじゃない」と述べ、自身の学習を肯定的に捉えにくくされている。

その他、年金生活であることによる経済面の問題や加齢に伴う目の衰えといった高齢学習者に関わる要因も挙げられた。

(3) 公開授業受講の成果

受講の成果としては、面白かった、楽しかった、人生を豊かにしてくれる、生活に潤いを与えてくれるといった声が受講者から聞かれたが、第一に、表 3 に示したとおり、＜余暇時間の充実＞があり、受講動機の 1 つはここでは充足されていた。例えば、H は特に関心があったわけではないが、「離散数学」や「細胞生物学」などの授業を受講し、内容が目から鱗で思いのほか面白かったと述べている。また表にはないが、G は学生時代のようにサブノートを作成して授業を受けていたが、授業では教員から試験を受けることを認められ、学生時代のように試験勉強をすることを楽しんだ。学生時代を懐かしむ楽しさというのは F も同様で、授業後に生協で食事をする際に学生時代を思い出し、それが喜びにつながっていた。

また時間に追われず、競争もない環境の中で自分のペースで知的好奇心を充足する楽しさを味わうといった高齢者ならではの学びについて言及した者もいた。加えて、E のように、若者と一緒に学習することにより、精神的に若くなったとの話もあり、余暇時間を楽しむうえでの[健康の維持]も図れていた。

成果の第二には＜学習上の成果＞があった。これは一つには公開授業は回数が 15 回と比較的長期であるため、授業内容も体系的で、かつ表面的ではなく、その他の教育機会よりも[深い学びの経験]をしたという実感があった。二つめには、[長年のもやもや感の解消]があり、A は「無用の用」という言葉を学び、「今まで長い間感じていたものがすっきり凝縮」されたと表現しており、また D も受講を通じて、「今までもやもやしていたのが、ここへ来て、何か深まったような気がしますね」と述べている。これまでの人生の中で様々な疑問を持つようになり、それらが学術的な学習を通じて、1 つの用語や理論で説明されることを知り、感動したり、爽快な思いを抱いたりしている。三つめは[キャリアの振り返り]で、J は教員時代の生徒指導の実際を振り返ったり、担当教科であった社会科の復習をしたりする機会になったとしており、特に指導などの経験が理論的に裏付けられることとなった。また[職業・活動上の能力の向上]もみられ、I は今も非常勤講師として高校で数学の授業をしているが、工学部出身で数学を専門として勉強してこなかったことがひっかかっており、また数学において疑問と思える課題も持っていた。しかし、時間ができたことで大学で数学を学び、ガロア理論についても理解が進み、高校生にもよりよい説明ができるようになった。

第三の成果は＜学習意欲のさらなる向上＞で、彼らは受講を通じて知的好奇心が高められたり、若年学生から刺激を受けたり、また加齢にも関わらず、自分の学習能力に自信を深めたりしていた。例えば、高卒の A は大学の正規の授業を理解できた、伝統的學生と比べても自分は劣っていないという実感を持つに至り、それが次の学習につながる自己効力感の向上をもたらした。また中には受講により授業内容への関心が高まり、受講後に授業内容に関わる学習を自主的に行った者もいたが、例えば B は「アメリカと世界」という授業を受け、その後実際に訪米している。

表 3 受講の成果に関わるカテゴリー、定義、事例数、サブカテゴリー及び代表事例

カテゴリー	定義	事例数	サブカテゴリー	代表事例
余暇時間の充実	大学での授業が楽しく、刺激的で、若年学生と学ぶことで精神的にも健康でいられること	8	学習の享受	・思ってもいない科目にチャレンジして結構勉強になったりして良かったこともある。離散数学の講座や細胞生物学などは目から鱗でとても面白かった。今回の様に学びたいものを学ぶ喜びは貴重だった。雑学ではあったがこれら学んだものは生活にうおいを与えてくれている。(H)
			健康の維持	・若くなりましたね。ここへ来てからね、こういう若い子と一緒に勉強したらね、精神面が若くなりました。友達も若うなったなとよく言われる。(E)
学習上の成果	他の機会では味わえないような深い学びができたり、これまでの人生で疑問に思っていたことが理論的に理解できたり、あるいはこれまでのキャリアを学術的に考察できたり、仕事や活動に関わる資質能力の向上が図れたりすること	8	深い学びの経験	・実際受けて、私自身は勉強になりましたよ。もうほんまに。まあ大学は授業なかった、中学高校でも歴史をやってきたけど、ただ流すだけやないですか？奥なんかないし、こことこのつながりなんかないし、単語覚えるのが精いっぱいという感じが、いろんな問題から言ったら掘り起こされて、こっちの問題がこっちの問題に関わってくるんやという因果関係はよう勉強させてもらいましたね。(C)
			長年のもやもや感の解消	・公開授業で一番うれしかったのは、＜無用の用＞という言葉が教えてもらったことです。この言葉の中に歴史などを学ぶ意味がすべて入っており、今まで長い間感じていたものがすっきり凝縮され、講座から帰る途中本当にうれしかったです。(A)
			キャリアの振り返り	・A: 自分が今まで出会ってきた生徒のこととか、今まで自分が経験してきた教え子のこととか、それとすぐ絡み合ってきますね。ある意味ね、少し大仰ですけど、理論的な裏付けが、それがいろいろ自分の経験と結びつくんですよ。Q: 自分のキャリア経験が理論的に整理されるということですか？A: そうそう、そういう感じ。特に地域文化論というのは地理学の勉強で、私のかつての専門、中学校社会科と関連していますので、もう1回自分で復習というか、そういうこともありまして(J)
			職業・活動上の能力の向上	・現在は、数学を得意とする高校生に説明できるようになった。ガロア理論を少しずつ分かってきたように思います。(I)

学習意欲の向上	受講により授業内容への関心が高まったり、自分の学習能力に自信を持ったり、さらには若年学生から刺激を受けたりして学習意欲が高まること	5	知的好奇心の強まり	・自分自身についていえば、さらに深く、というか、もっとこういうチャンスがあったら、違う、幅広い、他のことを聞いてみたいなのはあるんですよ。・・・だんだん出てくるよね。だから僕、A 先生の話聞いてアメリカの歴史に改めて関心を持って、今年さっそくボストンからフィラデルフィアとかね。アメリカの独立の前後の地域へ 1 回行ってみたいと思いついてきました。・・・フランスについても、I 先生の、絵とか僕はあんまり、フランス映画とかようわからんけど。フランス映画とかインターネットで探してみたりとか。(B)
			伝統的學生からの刺激	・Q: 学生と一緒に学ぶというのは? A: 私は刺激を受けましたよ。・・・先生によっては毎日レポートではないですけど、質問事項的なものを書かせる人もおる。それが出席につながるといえばそれまでなんやけど、皆書いてるなあという感じでしたですね。(D)
			自分の学習能力への自信	・歴史関係ではですね、先生方と授業終わってから、2、3 話をしたり、今、生徒の言っていることを聞いたり、先生が質問されるのの答えを聞いたり、自分の持っている歴史とかその周辺の知識とかが決して捨てたもんじやないなと思いましたね。絶対に負けてないなと思いましたね。それをもっと突っ込んでいけたらなあとは思いますが。(A)
大学・大学生への理解と関与	受講を通じて、大学教育に加えて、若年学生や留学生への理解が深まったり、学生と共に学ぶ中で彼らの成長に役立つという認識を得られること	5	若年学生への理解	・若い人もなかなかしっかりしているなとか、あるいはけっこう海外の留学生の方々もいらっやあって、ああ彼らもよう考えている、彼らと今後うまくやれたら、日本もいいなあとか、そういう気がものすごくしますね。(B)
			留学生への理解	Q: 日ごろはなかなか一般の方は留学生と接する機会はないですね。A: そうなんです。外国の方の考え方もいろいろかなあ。今までテレビや新聞で見てると、ちよつと会話してみると、今まで政治の話しか知らなかったけど、個々に会おたら全然違うなと感じました。(E)
			大学への理解	今孫が大学に行っていますが、今こういう感じで勉強しているのかというのはわかりますね。孫が言うてることはこういうことを言うてるのやなとか。具体的に想像がつかますね。(A)
			次世代の成長への関与	・我々が授業公開で教えていただいたことを返せるかと言われると返せないんだけど、やっぱりそこで若い人と何か意見交換のようなことができたのがよかった。(B)

成果の第四としては、＜大学・大学生への理解と関与＞で、そのサブカテゴリーとしては、[若年学生への理解]があり、受講者の中には、「若い人もなかなかしっかりしているな」あるいは「皆書いているなあという感じがしました」と述べた者もいたが、特定の国立大学の学生についてとはいえ、伝統的な若年学生の授業での受講ぶりを見る機会が人々にはない中、彼らの受講姿勢について知ることとなった。また若年学生の成長について元々関心を持っていた受講者は学生と一緒にグループワークをすることを通じて、彼らに刺激を与えたり、経験を伝えたりして、彼らの成長に多少なりとも寄与できた（[次世代の成長への関与]）という実感を持っていた。加えて、大学外の者は留学生と接する機会も通常多くないが、グループワークを通じて、彼らと話し合うことにより、E のように彼らへの認識を深めたり、外国人への偏見が薄れたりしていく経験をする[留学生への理解]もみられた。その他、正規の授業を受けることによって[大学教育への理解]も進んだとの声も聞かれた。

(4) 大学・大学院への進学

本調査においては、公開授業を受けて、関心や学習意欲が高まり、正規の学生として入学したくなったという者はいなかった。また 10 名中、4 名は自分の学習目的は＜余暇時間の充実＞と＜学習ニーズの充足＞であって、学位取得には関心がなく、公開授業が自分にとっては適した学びの場であるといった理由で進学には関心を寄せていなかった。しかしその一方で、6 名が進学に関心を持っており、そのうち 3 名の関心は強かった。その中の 1 名である E は心の問題に苦しんでいる人への支援に向けての専門性を高めるために進学を希望しているが、「こういう歳になって入学する場合、今更試験受けても、恐らくダメです」というように、「社会人特別選抜」を多くの大学が実施していることを知らず、進学に向けては若年学生と同様に、英語などの科目の試験を受けなければならないと思っていた。

J も本当は通学制の課程に入学し、若年学生と一緒に学ぶことを希望しているが、退職後、週に数日、外国にルーツを持つ子どもの支援に関わる仕事をしており、仕事を抱えた環境では通学制での学修は困難なのではないかということで思いを叶えられていない。しかし、執筆者が 1 年間又は 1 学期間に修得可能な単位数を自身の都合に合わせて少なくでき、その代わりに修業年限を超えて在学できる「長期履修学生制度」について話すと、それについては知らず、「私は実はそういうのを求めているんです。確かに（3 年次編入して）2 年で集中してというのは厳しいですね」と、そういう制度があるのなら可能かもしれないと関心を強めていた。このように進学を希望しながら、支援施策が実施されていることを知らずに、進学に踏み出せず、公開授業を受講している例が複数みられた。

また例えば古文書の講読を長年にわたりやりたいと思いつけていた A も進学について調べていたが、「よく見ると、とにかく、ほぼ、言うたら、自分の生活を全部注ぎ込まなあかん。ほかの趣味とかね、やりたいこととか、いかんなあと思って。それでいろいろとねえ。

一部を勉強するようなものないかな」と語ったように、進学すると他の同様に組みたい活動などとの両立が困難になると考え、公開授業を選択した。しかし、今でも A の心の中では折りに触れて、大学で専門的に古文書を読みたいという思いが湧き上がっているようで、他活動との優先順位の面で葛藤を抱えている。

このように大学で学ぶことには関心があるが、正規の学生として進学すると多大な労力・時間が必要となることから、代わりに公開授業を受講した者もいた。

(5) 公開授業の特徴

ここまで公開授業受講の動機や成果などについてみてきたが、受講者自身は公開授業の特徴、独自性についてどのように考えているのであろうか。その点について尋ねると、第一に先行研究と同様に、<若年学生の存在>が挙げられた。公開授業は正規の大学の授業であるので、受講者は基本的に若年層と一緒に授業を受けることになる。そのため、今の若者はどういった考え方を持っているのかなどを知ることができたり、若年学生から刺激を受け、張り合いを感じ、学習意欲が高まったりしている。

第二は<正規の学校教育が生み出す雰囲気>で、正規の授業ということもあって、教員も一生懸命で、学生も単位を取らなければならないということで、真剣度が他機会と比べて異なると述べる者もいた。また授業によっては、テストを受けることができ、それにより理解度が上がったり、授業コメントを提出し、それへのコメントが返ってきたり、グループワークに参加できたりして、それが緊張感や喜びを生み出してもいた。

第三には、これも先行研究で指摘されていたが、<教育水準の高さ・深さ>があった。公開授業は大学の正規の授業ということで、水準が比較的高く、また 15 回の授業ということで、授業内容に連続性、体系性があり、受講生にとっては深くもあり、広くもありという内容となっていた。確かに公開講座は調査対象であった 2 校の大学でも数回程度の短期のもので、この 2 校にとどまらず、全国国立大学生涯学習系センター研究協議会の加盟大学対象の調査においても、公開講座の開講回数は 11 回以上も一部にみられたが、1 回もしくは 3~5 回が多くなっていた¹⁰⁾。

第四には<受講の現実性>があった。受講者は高等教育水準の学習に関心を持つ者らであったが、そういった学習に従事する手段としては、その他に社会人として大学に入学することがある。しかし、前述したように、受講者の中には他にも組みたい様々な趣味を持っている者もあり、また親の介護や自身の健康状態、あるいは年金生活ということを考えて、時間上、経済上、負担上のバランスという点で公開授業が適当であると考える者もいた。大学教育に興味を持つ受講者からすると、公開授業はハードルが低く、気軽に、現実的に高等教育段階の学習に従事できるものとみなされていた。

4. 大学開放における公開授業

公開授業は全体として、〈既存の教育機会への不満〉を持っている層に対して、〈正規の学校教育が生み出す雰囲気〉や〈教育水準の高さ・深さ〉によって満足感を高め、〈余暇時間の充実〉や〈学習上の成果〉〈学習意欲の向上〉といった成果を生み出していた。また特徴の 1 つである〈若年学生の存在〉により〈大学・大学生への理解と関与〉が促進され、〈次世代への関心〉を持つ者は[次世代の成長への関与]によって自身の有用感を感じる機会ともなっていた。加えて、〈若年期のやり残し感〉を持つ者にとっても、長年の思いを叶える場ともなっており、それが〈余暇時間の充実〉につながっていた。公開授業は公開講座よりも受講者の評価が高いという結果も示されているが¹¹⁾、実際、本調査においても情報提供者は公開授業に高い満足度を示しており、今回の調査対象の A 大学では公開授業は調査開始の前年度で廃止になったが、情報提供者からはぜひ復活させてほしい、これまで学んできた教育機会の中で一番良かったという趣旨の話が複数からあった。ただ一方で、公開授業という機会はあるけれども、大学の授業は正規の学生のものであり、実際には自分たちは大学や大学生から歓迎されていないのではないかという〈大学への遠慮〉からばつの悪さを感じた者もいた。

今回の調査結果から、公開授業には三つの側面がみられた。その第一は、公開授業は[幅広い知識への渴望]などを満たすという点で、〈余暇時間の充実〉を望む人々にとっては適当な手段となっており、社会教育や公開講座といった他機会に満足できていない人を魅了しているというものである。

第二は[長年学びたかった学習テーマの保持]といった〈学習ニーズの充足〉を持っているが、それを進学して専門的に学ぶと他活動が行えないと考える人が次善の選択肢、もしくはは適当な選択肢として受講している面である。

そして第三は、実は〈学習ニーズの充足〉や〈若年期の教育上のやり残し感〉から通学制課程への入学を望んでいるが、それに踏み出せずにいる人が止まり木のようなものとして公開授業を受講しているという面である。

受講者は平日の昼間に通常開講されていることもあり、定年退職者が多くなっているが、高齢学習者の観点から考察してみると、高齢期は「時間のパラドックス」と言われるように、退職によって役割から解放され、自由な時間を多く持てるようになる一方、人生の残り時間が少なくなっていくという感慨にも囚われる時期にある¹²⁾。そういった背景から、〈余暇時間の充実〉への思いが強くなり、やり残したことがないようにやりたいことは何でもやりたいと考えるようになる。残された人生の中で学習の他にも同程度でやりたいことがある人にとっては、この公開授業は受講上利便性の高い(〈受講の現実性〉)取組となっていた。

また高齢者は様々な学習ニーズを持つとされている¹³⁾。ここでは<余暇時間の充実>は退職後の余暇時間を有意義に活用しよう、あるいは加齢による健康の低下に対処しようとする「対処的ニーズ」に関わるものであった。またこれまで表現できなかった内面深くにあるものを解放したり、あるいは先延ばしにしてきたことに取り組んだりする「表現的ニーズ」があるとされているが、これは<若年期の教育上のやり残し感>や[長年学びたかった学習テーマの保持]が該当し、ここではこの 2 つのニーズが受講への強い動機づけ要因となっていた。またそれ以外にも他者や社会に貢献したいという「貢献的ニーズ」、他者や環境に肯定的な影響を与えたいという「影響的ニーズ」、さらには人生の振り返りをしたいという「回顧的ニーズ」などがあるとされているが、本調査では[社会貢献志向]は<貢献的ニーズ>に、[世代継承性]は「影響的ニーズ」に、また[キャリアの振り返り]は「回顧的ニーズ」に関わるものと考えられ、「対処的ニーズ」や「表現的ニーズ」を中心に、高齢者特有の様々な学習ニーズの反映がみられた。

5. 公開授業の課題と今後に向けて

公開授業は満足度も高く、受講者の様々なニーズを充たしているが、木暮の言うように、毎年同一の授業が通常公開されるものであるため、受講者からすると進展性のないものになる¹⁴⁾。また一部の科目のみの公開であるため、特定の分野について様々な授業を体系的に受講し、専門を深めようという場合には限界がある。特定の分野について専門的・体系的に学習するには入学するという選択肢もあるが、他活動との優先順位の兼ね合いからそれは困難と考える人もいる。そういった人たちには、特定のテーマに関連した複数の授業科目をパッケージにした形で提供し、他活動と両立できる形で関心のある分野の学習を深められるようにするという方策もある。職業能力の向上に向けた教育機会などは履修証明プログラムとして 1 つのパッケージにして提供されているが、教養系の授業も複数の授業をまとめて 1 つのパッケージとすることで上述の問題点を緩和しながら、彼らのニーズを充たすことができる。

また富山大学の受講者調査では 26.6%が進学に関心を持っていたが¹⁵⁾、本調査の中にも希望者がみられ、公開授業は進学希望者の止まり木的な機能も果たしていた。ただここでは様々な社会人受け入れの施策について知られていないことから進学に至っていなかったため、受講者の思いの実現に向けて、情報提供などを通じ、進学への橋渡しを行っていくことも求められる。

大学にとっても、公開授業は大学の教育研究への理解者や大学教育の恩恵を受ける当事者を増やすという点、並びに受講者の意欲や経験などを授業そのものに活かすことによって教育の質の向上につながられるという利点がある。[世代継承性]という点から<次世代への関心>を持つ受講者も存在することから、受講者も協力的に関与してくれると考えられる。現在は高齢男性が受講者に多いが、近年は業種によっては平日が休みという職業人も

多い。気軽な受講形態ということを活かして、より広範な成人が受講するようになるという教育効果も期待できる。

ただ受講者という教育資源を活用するには教員にもマネジメント能力が必要で、先行調査にもあるとおり、一部に肯定的ではない影響を授業に与える受講者もいるとされている¹⁶⁾。そこで教員向けの FD や受講者への事前ガイダンスなどを実施するということが検討する必要がある。FD では受講生を受け入れるメリットについても理解してもらおうと同時に、受講者は受講を歓迎されているという印象を持てるような文化づくりもしていくことが求められる。

6. 最後に

今回は教養系の授業を中心とした公開授業の受講者調査であったが、この公開授業はその特徴から公開講座と正規学生としての入学の間で可能性を秘めたものと言える。

本調査においては、知的好奇心に基づき、純粋に学びたい事を自主的に学ぶ楽しさというものが受講生からひしひしと伝わってきた。職業能力向上のための学習、経済成長のための学習について声高に叫ばれている現在、対象者は高齢者であったが、高齢期に、あるいは高齢期に限らず、このような精神的に豊かさを感じられる時間を持つことの重要性を感じた。

大学での伝統的学生の学習は就職や卒業に向けてといった、フルの言う目標志向的なものになるが、それとは異なる学習志向的な受講姿勢を見て学生は何を感じ、どのような影響を实际受けているのか。それに関する研究の蓄積も十分ではないが、今後学生の側から見た公開授業の実際についても研究を進めていく必要がある¹⁷⁾。また今回は高齢受講者を対象とした調査研究で、一部の他世代の受講者が含まれていないという問題がある。今後、公開授業もより幅広い年齢層に広げていくことが望まれるが、他世代にとっての公開授業の特徴についても検討していく必要がある。

最後に今回、調査にご協力いただいた方には心よりお礼を申し上げます。

注)

- 1) 中央教育審議会「生涯教育について (答申)」1981 年、第 4 章 2。
- 2) 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像 (答申)」2005 年、第 2 章 3。
- 3) 文部科学省「平成 30 年度大学等におけるフルタイム換算データに関する調査 (概要)」2019 年、p.3。
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/06/_icsFiles/afieldfile/2019/06/26/1418365_01_3_1.pdf
(最終アクセス日 2021 年 10 月 15 日)。
- 4) 滋賀大学生涯学習教育研究センター「公開授業 (半期 1 コマ全体) の実施について : 実施までの経過と課題」『滋賀大学生涯学習教育研究センター年報』(2001)、2002 年、pp. 6-16。
- 5) 文部科学省「平成 29 年度開かれた大学づくりに関する調査研究」2018 年、

https://www.mext.go.jp/content/20200929-mxt_chisui01-100000171_1.pdf

(最終アクセス日 2021 年 10 月 15 日)。

- 6) 神部純一「〈調査報告〉滋賀大学の公開講座・公開授業の評価：過去 3 年間のアンケート調査結果を基にして」『滋賀大学生涯学習教育研究センター年報』(2009)、2010 年、pp.53-95。
- 7) 例えば、藤澤建二「2008 年度「岩手大学公開授業講座」について」『岩手大学生涯学習論集』(5)、2009 年、pp.75-82。
- 8) 例えば、富山大学地域連携推進機構生涯学習部門「2018 年度富山大学公開講座とオープン・クラス(公開授業) アンケート調査報告」『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』(21)、2019 年、pp.7-25。
- 9) 藤澤、前掲論文。
- 10) 澤田和弘「大阪教育大学における生涯学習支援活動の状況－実施に関するアンケート調査の結果から－」『教育実践研究』No.3、2008 年、p.155。
- 11) 神部、前掲論文。
- 12) Russel,H.,“Time and Meaning in Late-life Learning”, *Australian Journal of Adult Learning*, Vol. 51, No.3, 2011, pp.547-565.
- 13) McClusky,H.Y., “Education for Aging: The scope of the field and perspective for the future” , in Grabowski,S & Mason, W.D(eds), *Learning for Aging*, Adult Education Association of the USA and ERIC Clearinghouse on Adult education, 1974, pp.324-355. Tam, M., “A distinctive theory of teaching and learning for older learners: why and why not? ”, *International Journal of Lifelong Education*, Vol. 33 Issue 6,2014, pp.811-820.
- 14) 木暮照正「地方大学における公開講座の在り方－「公開講座・公開授業アンケート」を振り返って」『福島大学生涯学習教育研究センター年報』13、2008 年、pp.15-27。
- 15) 仲嶺政光「大学開放に関する意識調査：富山大学公開講座・公開授業受講者を対象として」『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』(16)、2014 年、pp.58-70。
- 16) 富山大学地域連携推進機構生涯学習部門、前掲論文。
- 17) Houle,C.O., *The Inquiring Mind*, University of Wisconsin Press、1961、pp.16-29.

出相 泰裕 (であい やすひろ)

山口県生まれ。現在、大阪教育大学教育学部教育協働学科教育心理学部門教授、日本社会教育学会理事、大阪市社会教育委員。全国社会教育職員養成研究連絡協議会理事、専門分野は社会人学生論、リカレント教育論、大学開放論。主な著作 編著『大学開放論－センター・オブ・コミュニティ (COC) としての大学－』大学教育出版、2014 年。「明治期の高等教育における成人学生在籍の背景－私立専門学校に焦点を当てて－」日本社会教育学会編『社会教育学研究』52、2016 年。「オーストラリア高等教育における成人学生－近年の動向－」『日本生涯教育学会年報』第 38 号、2017 年。「職業人の大学院進学に向けての動機づけに関する考察－専門職大学院ビジネススクール在籍生へのインタビュー調査から－」『日本生涯教育学会年報』第 39 号、2018 年。